

【エッセイ】

ヨリ三態

——日本語雑誌・後拾遺——

工藤力男

『都会の憂鬱』から

前回は、冒頭にクイズもどきの問いで読者の安寧を脅やかした。今回はクイズと銘うつことはしないが、佐藤春夫『都会の憂鬱』（1932）の一部に付きあっていたきたい。

さうして妻と話す以上に渚山と話しをしたではないか。かの女とても亦自分の夫より外の誰かと、それが男であるか女であるかは解らないが、ともかく誰かと、夫と以上の時間を又話題を話し合ふことであらう。（講

談社版全集第二巻 p.169）

九十年前の小説であるが、わたしは今みる文章とさほど差があるようには感じない。読者諸賢はいかに。何か違和感

を覚えるだろうか、何か過不足を感じずるだろうか。

国語辞典の記述

クーベルタンが提唱した、オリンピック憲章の「より速く、より高く、より強く」は、H・デイオンという人の言葉に発するのだという。原語はラテン語の “Citius, Altius, Fortius”、比較級の語尾 *ius* がついた副詞が用いられている。

これに類する決まり文句は日本語にも、「よりよい」「より美しい」「より多く」などいろいろある。昨年度まで、ラジオ第一放送の「土曜朝一番」の男性アナウンサーは、

「週末スポーツワイド」を、「やって楽しい、見ても楽しい。スポーツは人生をよりゆたかにしてくれます」と始めるのが常であった。これらの「より」^①ということばの「より」^②はいかなる語なのだろうか（本節では、高く発音される部分を傍線で示す）。

机辺の国語辞書のうち、一番新しい『岩波国語辞典』第七版の「より」の項をみると、①格助詞、②副詞とある。その②をひく。

②〔副〕……より一層。もっと。「どちらの可能性が——高いか」「演技を——引き立てるには」——高性能のプロセッサ——▽②は欧文の比較級の訳語として生じた。

この箇所、「より」の語義記述中に対象語の「より」を含むのは感心しないが、ここでは論じない。わたしの関心は別のことにある。

ほかの辞書の記述も大同小異である。アクセント表示のある『新明解国語辞典』は、副詞として掲出した見出し語に「より①（副）」とある。この①は、第一拍が高いヨリというアクセントであることを意味する。右にひいたアナウンサーのアクセントはヨリなので、この辞書の記述とあ

わない。

これはなぜか、などと構えて問うほどのこともない。ヨリユタカニと読まれるということは、副詞とされる「より」^①と、いわゆる形容動詞「ゆたか」^②とが複合して一語になっていることを意味する。第一拍が高いユタカと複合したために、ヨリのアクセントの高い部分が一つ後ろへずれたのである。こうしてヨリユタカという中高型のアクセントになったのであり、ヨリヨイ、ヨリオオクなども同様である。逆に、副詞「より」、形容詞「よい」の固有のアクセントを維持したヨリヨイは耳にしたことがない。

岩波国語辞典の用例の「より高いか」の部分を読んだみると、人によって異なるかもしれないが、「高い」の標準アクセントは中高型のタカイなので、ヨリタカイカとなる。つまり、高く発音される部分が二ヶ所にわかれるはずである。しかし、わたしの自然な速度による発音では、ヨリタカイカという、一続きの中高型のアクセントになる。ニュース報道もこの型であるが、これについて言及したもののあることをわたしは知らない。もとより、日本語は文法論のためにあるのではない。たかが「より」、されど「より」。

「より」の実態

国語辞書の記述の曖昧さと釣りあうように「より」の使用実態はさまざまである。

「よりビールに近い味」は、朝日新聞(2010.11.28)「情報フラッシュ」欄の記事の見出しである。本文中には「ビールに近い味わいにする」とあるが、何より近いのか遂に不明である。これは、アルコールを含まないビール風味飲料について、成分をかえることで味に変化をもたらしたというものである。従来の製品「より」の意らしい。この「より」は「近い」に係る副詞なのだろうが、現代日本語には、格助詞とも副詞とも解釈しえないものが多い。木簡学会研究集会の発表資料、「木簡解読支援のための情報処理技術」の一節をひく。

コンピュータとデータベースを活用すれば、よりも多くの木簡／古文書の中から類例を検索することが可能になります。(2010.12.4)

これもよくわからない。「よりも」は副詞「より」に格助詞「も」をそえたものなのだろうか。

東京都町田市域に配布されたフリーペーパー『シヨッ

パー』(2007.1.25) 第一面、筆頭記事の大見出しに「より愛犬のためのシヨップ」とあるのも不可解な表現である。リードの「大切な愛犬のために、より良い環境を用意したい」が言いたいことであるらしい。

朝日新聞の書評にみた次の文は、一読しただけでは意図が読みとれなかった。

「内なる敵」をつくり国論をまとめるという著者の指摘などより詳しく知りたいと読者は思うだろう。(『日露戦争と新聞「世界の中の日本」をどう論じたか」2010.1.17)

「より」は上接の句「著者の指摘など」につく助詞なのか、下の「詳しく」に係る副詞なのか、わたしは迷ったのである。

次の文も同類である。

IPPCの運営に関する検証結果は、利益相反についてより透明性を高めるよう求めた(朝日新聞「ニュー スひと舞台裏」2010.9.5)

ここは、せめて語順を変えて、「透明性をより高めるよう」とすべきところであった。

この程度の文章で二度読みを強いられるのは迷惑千万で

ある。それを回避するために、格助詞か副詞かそれ以外か、曖昧なままに放置せず、しかと措辞を整えるべきだ、とわたしは考える。それを律儀に誠実に実行した例を紹介するが、かかる人は極めてまれな存在である。その一――。

そこにおいて本書が時代に、より、沿っていると感じ。 (清文堂刊『仮名表記論攷』 p.533 2001)

これは、「より沿って」と読まれることを避けるべく、「より」と読点を入れたのだろう。これなら確かに誤読される恐れはないが、今度は読点のために「沿う」への係りかたが中途はんばになって、上等な処理とはいえない。

その二も同じ著者の別の著書から。

いわば行き来可能な同値の表現ということに、より、なるかもしれない。(清文堂刊『大山祇神社連歌の国語学的研究』 p.471 2009)

これは、「同値の表現ということになる」とあるべきところ、「に」「なる」を強引に引きはなしたものである。動詞「なる」と必須の二格補語は直近におくのが日本語の典型的な構文なのに、それをあえて引き離してまでこの位置に「より」を用いる意図がわたしは読みとれない。類義の他の副詞、例えば「いっそう／さらに／もっと」などを文の

上部に用いるなりすればすむだろうに。

専門家の実例

文筆をなりわいとする人の文章をさらにみていくと、いろいろな用例が拾える。

日本人は辞典で漢字を探す際に字音索引よりも字訓索引をより利用する。(河出ブックス『日本語は生きのびるか』 p.214 2010)

上の「より」は格助詞、下のそれは副詞のつもりなのだろう。副詞「より」は程度副詞として形容詞や形容動詞に係るのがふつうだが、ここでは動作動詞「利用する」に係っていることになる。このたぐいも多く見かける。

作家の用例では、芥川龍之介『大導寺信補の半生』三(1923)に「よりもより」がある。

彼は何よりも先に退職官吏の息子だつた。下層階級の貧困よりもより虚偽に甘んじなければならぬ中流下層階級の貧困の生んだ人間だつた。

わたしには完璧に理解できたという自信がない。一見、先の本簡学会の例に近いようだが、それより厄介な措辞というべきだろう。

「よりもより」は、幸田文の文章にもみえる。

この坊やは私よりはしこい知慧をもっていたし、私よりもより余計に豆腐の魅力に惹かれた、というだけの違いなのである。(岩波書店版全集第十一巻 p.179)

こちらは「余計に」でさらに強めているが、芥川の記事よりはわかりよい。

ドナルド・キーン『日本人の美意識』(中央公論社 1980 p.40)は、英語の原著を日本人が訳したものである。ここに「よりもより」がみえる。

短歌形式が文字通り短いことは、知的な主題を十全に取り扱うことを許さなかったし、感情にしても憂愁よりも強い情緒を描くのは、おそらく無理だったのだ。原文がどうであったか、しりたいものである。

「より」の近代史

助詞でも副詞でもない「より」の位置づけについて考えるために、森岡健二『欧文訓読の研究——欧文脈の形成——』(明治書院 1999)の成果をかりるとしよう。

その第四章「欧文脈—形容詞」の「1 比較級」の導入部は次のとおりである(原著は横組み)。

日本語で比較するとき、格助詞「より」を用いるが、英語の比較級を直訳する際は、これに副詞を添えて、「～より尚」「～より更に」「～より一層」などと比較の意を強めて訳される。また、ここから「より大きい、より強い」などと「より」が副詞として用いられるようになった。

このたぐいの「より」を、通説どおりに「副詞」と解している森岡さんから、その実例を少し借りる(本節の傍線・下線は原著のものである)。

初めに明治廿一年の英語読本における直訳。

it was noisier than ever.

其レハ曾テヨリ尚なほ嘈シクアリシ

続けて、明治廿二年、坪内逍遙『細君』の例。

夫人の顔色常つねよりも一倍わるく、

最後に、明治廿九年、森田思軒訳『間一髪』から。これは、ポーの「陷穽と振子」(The Pit and the Pendulum)の翻訳である。

之を要するに結局は死、尋常の死よりは更らに一しは残酷なる死に在ることは

That the result would be death, and a death of more

than customary blemish,

「尋常の死より残酷なる」で原文の意味は伝えうるのに、「更らに」「一しほ」と副詞を二つ重ねたわけである。「より」はもう比較の意味を積極的に負わないようにみえる。

比較級の語法が日本語に取り入れられたときから、「より」は微妙な位置にあったのだろう。右の英語読本の例でいうと、「かつてよりさわがしい」で原義は捉えているのに、さらに「なお」を加えずにはおられなかったようだ。それは、比較級が語尾の屈折で表現しえた印欧語に対して、副詞を用いるほかない日本語の違いがもたらしたものであろう。

それへの対応も人さまざまであつたようだ。ヘボン『和英語林集成』英和の部の対訳は、Better に対して、初版(1867)では「良い、勝る、いい、及く、まし」と表記で、きる語があてである。再版(1872)・第三版(1886)では、形容詞には「なおよい、もっとよい」を掲げている。

ヘボンより遥かに早い、メドハースト(W.H. Medhurst)の通称『英和・和英辞彙』(1830 バタビア)における対訳は、「ヨリ ヲ、ク」に More、「ヨリ ワルク」に Worse、「ナリ ヨク」に Better があててある。日本語は分かちが

きされているが、実際の発音はどうだったろうか。一続きに発音されていたのではなからうか。

接頭辞「より」

先にみた「よりよい／より豊かに／より大きな」など、アクセントに着目した論述から導かれることがある。形容詞・形容動詞と複合しているのだから、「より」は既に助詞でも副詞でもない。すでに「接頭辞」に転じているのだと。

これは決して突飛な発言ではない。印欧語の比較級・最上級に相当する語法は日本語にはないが、これにたぐえられる表現がある。古代語にそれを探すと、最上級には「ま(真)」がある。形容詞についた「真悲し」、形容動詞語幹についた「真さやか」、副詞の「まさき(真幸)く」などがその一例である。現代語には「真新しい」「真っ黒」などがある。

「真」が最上級相当の接頭辞だとすると、古代日本語で比較級のそれに相当するのは「いや(弥)」であろう。「いやなつかし」「いや高に」「いや清に」「いや愚に」などがすぐに思いつくべられる。こちらは、分析的な表現を志向

する現代語には受けつがれなかったが、これを受容する素地はなおあるのである。二拍の接頭辞「より」は、「いや（弥）」の後身といえるだろう。

かくて、「より」に関する辞書の記述は、①格助詞、②副詞、③接頭辞とすべきである。そのうえで、②か③かの識別がたいそう難しいことにも言及するがよいと思う。

さて『都会の憂鬱』に戻る。じつは、先の引用部分には、「よりより」を削った箇所が二つあるのである。復元すると、「妻と話すより以上に」「夫とよりより以上の」となる。「よりより」がなくても文意は十分に通ずるので、ずいぶん過剰な表現だと思う。

『日本国語大辞典』第二版の「より」の子見出しに「より以上」があつて、田山花袋『一兵卒の銃殺』（1917）、矢田挿雲『江戸から東京へ』（1921）の用例が掲げられている。この時期、すなわち大正期の中・末期、この表現がはやっただのだろうか。佐藤春夫はその「より以上」に、さらに「より」をそえたことになる。

外国語の影響で近代日本語にうまれた、格助詞「より」を用いた比較級の表現である。日本人はその新しい用法に親しむうちに、「より」が副詞として、または接頭辞とし

て機能していることを忘れてしまった。「より」は独り歩きはじめたのだといえよう。これも、本連載の第八回で論じた「接辞の陥穽」（『成城文藝』214 2011.9）に嵌った一例である。

（二十二年六月）